



MITと日本企業間でコンサルティングし、プロジェクトコーディネータを務めた。Zoom（ウィーン・オーストリアにある国営子供博物館）のアドバイザー。2003年のNPO法人バンゲア設立当初から理事長。2004年には文部科学省初等中等教育局 国際理解・教育諮問委員会諮問委員を務める。

2005年日経ウーマンオブザイヤー2006（キャリアクリエイティブ部門）受賞。2006年より文部科学省国際教育推進プラン・三重県国際教育推進地域連絡協議会委員を務める。韓国ユネスコの青少年国際交流センター（Mizyセンター）で開催された「Training Workshop of Activists for

activating Youth International Cultural Exchange」でキーノートスピーカーとして招待講演を行う。2007年第一回International Workshop on Intercultural Collaboration (IWIC 2007) において活動家代表としてキーノートスピーチを行った。2008年オランダのClub of AmsterdamとWaag Society共催のカンファレンス「Future Of Children」において招待講演。モンテッソリー教育理論を応用し、玩具・スペース・人間関係の3つのバランスが良いことが子供の健全発育につながるという持論を実践。ファシリテーション技術を取り入れ、こども達が国境を超えてコミュニケーションを円滑に図るための使い勝手の良いこども向けICT異文化コラボレーションのコンテンツを企画・開発を自ら行い、世界のこども達が個人的なつながりを築くためのユニバーサルプレイグラウンドを創りだす。

Westwood Reunionのスピーカー 細谷早里（ほそやさり）

1999年 Education, Ph.D. UCLA



上智大学、大学院、そして私立中高一貫教育学校での教員を経て1992年からUCLAで学ぶ。その後、日本との往復を繰り返しながら、1996年Graduate School of Education, Social Science and Comparative Education博士課程修了。1998年より関東学院大学経済学部勤務。現在准教授。専門は異文化間教育、多文化教育、教員養成。1999年にUCLAよりPh. D. (Education) 取得。2006-2007年フィンランド、ヘルシンキ大学にて在外研究。日本とフィンランドをはじめとするヨーロッパ諸国を主なフィールドとして研究。



UCLAを卒業してアカデミアで活躍している方々がたくさんいらっしゃる中、私のような無名の者が自己紹介させていただくことになりとても恐縮しています。教育学を学んだ私の現在の研究テーマは「教員の異文化間能力」で、今後多文化化する日本社会において異なる文化的背景を持つ児童や生

徒に教員がうまく対処し、彼らの能力を最大限に引き出すにはどのような能力が必要か、日本の教員にはそれが備わっているか、どのようにしたら、そのような資質能力を身につけることが出来るかを研究しています。フィンランドを研究のフィールドに選んだのは、OECDの国際学力テストで好成绩

をあげていること、大学までの教育が無償で日本やアメリカの教育制度の対極にあること、そして先進国の中では日本と同様に外国籍の居住者の割合が低く、研究テーマである「教員の異文化間能力」を日本と比較研究するのに好都合だったからです。現在の研究テーマに行き着くまでに、日米以外の先進国の教育に興味を持ち、オランダの学校の調査を行いました。欧米とひとくくりされるものの、アメリカとヨーロッパの国々の文化、価値観、制度には大きく違いがある事実と遭遇し、教育の比較調査と教育に「文化」という要素を取り入れた研究に焦点が絞られてきました。リベラルなカリフォルニア大学で学んだ教育学理論や比較調査の手法は斬新で、それまで教員という教育実践者の目ではしか教育を見たことがなかった私に大きな価値変換と刺激を与えてくれました。フィンランドでは教員の質が高いと言われています。教職課程の学生の異文化間能力